

【一般演題3】 第13席

『難経』脈論の考察

兵庫 梅木 茂樹

『難経』に於ける脈論は一難から十一難にかけて論じられており鍼灸臨床に於いてあつかわれる脈診の具体的な原則が表されている。

一難に「十二経皆有動脈。独取寸口。以決五藏六府死生吉凶之法」とあるように寸口脈診を採用していることが大きな特徴である。

本脈論中に於いて五藏を診する方法として脈差（五難十八難）による方法と脈状（四難十五難）による方法とがある。このうち四難五難についてはどのように臨床応用すればよいのか多くの医家が論じているが未だ解決されたとは言えないようである。

今回はこの問題について私見をのべ皆様のご批判を願う次第である。

五難には「脈有輕重何謂也。然初持脈如三菽之重與皮毛相得者肺部也。如六菽重與血脈相得者心部也。如九菽之重與肌肉相得者脾部也。如十二菽之重與筋平相得者肝部也。按之至骨挙指来疾者腎部也。故曰輕重也」とある。これは浮位から沈位までを五段階に分け各脈位に五藏を配当しているのである。

また四難には「心肺俱浮何以別之。然浮而大散者心也。浮而短澁者肺也。腎肝俱沈何以別之。然牢而長者肝也。按之濡挙指来実者腎也。脾者中州故脈在中」とある。これは浮は心肺、中は脾、沈は肝腎となっており五藏それぞれが正常に働いている時に打つ脈状をのべている。

これら2論から考えられることは浮位から沈位までのうち或脈位が虚をあらわしている場合これに配当されている藏が虚しているということである。即ち沈脈の場合は肺虚、心虚、脾虚となり浮脈の場合は肝虚、腎虚、脾虚となるのである。

経絡治療では六部定位診によって蔵府経絡の虚実を判定するがこのような脈の見方を考え合わせることでより正しい脈証をつかむことが出来るのではないかと思うのである。